

教職大学院の学修成果に係るポスターセッション発表者一覧

平成29年度

番号	大学院名	学年	氏名	現職、修了生の勤務校	成果発表のタイトル・要旨
1	秋田大学 大学院	2年	柴田 省吾	ストレートマスター	防災教育において自然現象の二面性（恵みと災い）を取り扱う授業実践
					自然災害が多い日本では、そのメカニズムとともに危険性を伝え、防災意識を高める教育を児童生徒に行う必要がある。しかし、片田(2012)は脅しやマニュアル的な知識だけの防災教育は逆効果であるとも指摘している。そこで、本実践では、小学校第5学年の理科「流れる水のはたらき」の単元において、流水がもたらす恵みと災いの二面性について取り扱い、その学習内容を踏まえて防災意識を高める授業とその評価を行った。
2	福島大学 大学院	1年	森本 遼	ストレートマスター	算数の授業における対話的な学び ～児童の相互作用に着目して～
					昨今、教育課題の一つとして、算数の学力の問題や、算数を嫌いという児童が多い点が挙げられる。それらの解決策として、授業において児童が対話的に学ぶ機会を充実させることが重要である。研究では、対話的な学びを実現するには、児童が主体的に考え、問いをもつことが必要であると分かった。これを基に、対話的な学びを実現するための具体的な授業やそのための教師の手立てについて、児童の相互作用に着目して報告する。
3	茨城大学 大学院	2年	秋元 祐城	ストレートマスター	対話的な学習活動を通して個の学びを深める授業づくり —小学校第2学年国語科「スイミー」の授業実践に基づいて—
					今日、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善が求められている。対話的な学びには、子ども達同士の話し合いや学び合いだけでなく、学習対象や自分の考えと向き合うことも重要である。子どもと教材・子ども同士の対話を促すために、中心人物になりきって日記や手紙を書く活動を取り入れて授業を構想・実践した。本研究では、この実践の考察を通して、個の学びを深める対話的な授業の在り方を検討したい。
4	創価大学 大学院	修了	賀田 純恵	船橋市立法典小学校 教諭	「話すこと」を取り入れた1年生の作文指導 —題材指導を中心に
					作文指導をする中で、学習者の意欲を高めることは難しいと感じている。この原因として、学習者が1人で考え、書き進めていることが大きな要因と考えた。本発表では、学習者同士が「話すこと」を取り入れた作文指導を提案し、「書きたいことを1つ選んで書く」という題材について、話し合いをし、メモを取りながら、構成し、記述に臨むよう学習を進めた。意欲を高めながら、書く力を身につけることの実現に迫った過程を発表する。
5	玉川大学 大学院	1年	江崎 一紀	足立区立栗原北小学校 主幹教諭	「〈自分ごと〉認識」で読む国語科「伝記」指導の開発
					伝記学習の課題は、「自分の経験と関連付けることが難しい。「生き方」の考え方が分からない。」とされている。「人物の行動や生き方と、自分の経験や考えなどの共通点や相違点を見付ける」ということは、内容的な読みに、読み手自身が加わるということ、つまり主体的な読みを行うということである。主体的な読みを行い、自分の生き方に活かして読む方法を、〈自分ごと〉認識により可能にし、伝記学習の課題を解決する。

番号	大学院名	学年	氏名	現職、修了生の勤務校	成果発表のタイトル・要旨
6	島根大学 大学院	2年	安達 和哉	ストレートマスター	<p>児童の経済認識を育てる社会科授業開発に関する実証的研究 —商品価格の決定因を推論する実験的授業を通して—</p> <p>一般に社会科授業では、子どもの社会認識を育成することが求められている。児童の経済認識を育てるには、適切な「追究の視点」に基づいて社会的事象の本質に迫る授業を展開することが必要である。本研究では、まず商品価格の決定因に関する質問紙調査から、児童の経済認識の発達の特徴とその課題を見出した。そして、調査結果を踏まえ、子どもの経済認識を育てる指導方略としての「視点」を実験的授業を通して明らかにした。</p>
7	鳴門教育大学 大学院	2年	土井 国春	東みよし町立足代小学校 教諭	<p>小学校算数科の情報を整理する学習活動の体系化と授業設計</p> <p>小学校算数科において情報活用能力を育成することができる学習活動を同定し、「情報を整理する学習活動」と定義した。その系統を整理した結果、算数科の「情報を整理する学習活動」では、「比較する」、「変化をとらえる」、「関係づける」などの思考を用いて、問題解決を行うことが多いことが明らかになった。これらの思考スキルを意図的、継続的に指導することが算数科で情報活用能力を育成することにつながると考え実践した。</p>
8	長崎大学 大学院	2年	岩崎 紗知	ストレートマスター	<p>仲間とのかかわりを大切にする態度を養う体育の授業づくり —運動を行う楽しさを感じることをを通して—</p> <p>本研究の目的は、仲間とのかかわりに焦点をおいた「体づくり運動」の授業を実践し、その効果について明らかにすることである。そのために、長なわを用いた運動を行う中で、児童がかかわり合う場面を設定した授業実践を行った。実践を通して、①児童に提示する条件の検討、②運動が「できる」という土台の必要性の二つの課題を見出した。これらを踏まえ、新たに構想した授業について提案する。</p>
9	大分大学 大学院	2年	細川 航平	ストレートマスター	<p>「地域」素材を活用した小学校社会科授業の在り方 —「地域の魅力」「地域の課題」に注目して—</p> <p>本研究は、地域の衰退期における地域素材を活用した小学校社会科授業の一つの在り方を提起しようとするものである。児童が自分の生活する地域に関心を持ち、地域の課題に対して自分の考えをもてるようにするため、「地域の誇り」と「地域（時代）の課題」を地域素材の選択の視点として、5年の産業学習、6年の歴史学習の授業を開発し、連携協力校において実践した。本日は、そのうちの前者を中心に成果を発表する。</p>
10	鹿児島大学 大学院	1年	山口 小百合	西之表市立現和小学校 教諭	<p>小規模校の課題解決を目指した鹿児島県の特徴ある教育実践 ～テレビ会議システムを用いた離島との遠隔授業デザインを中心に～</p> <p>教育現場には不登校をはじめとする現代的課題が複数あるが、離島へき地の多い鹿児島県には独自の教育課題がある。本教職大学院では、「ICT活用、複式学習指導の工夫・改善、小中一貫教育、学社連携のカリキュラム開発、ユニバーサルデザイン等」を視点とし、理論と実践の往還を図り解決策を探究している。特にテレビ会議システムを用いた遠隔授業は、指導法深化だけでなく、地域と連携した学校改革への高い可能性をもっている。</p>

番号	大学院名	学年	氏名	現職、修了生の勤務校	成果発表のタイトル・要旨
11	北海道教育大学 大学院	2年	柴田 題寛	北海道教育大学 附属釧路中学校 教諭	<p>不登校傾向の生徒に対する支援 ー過剰適応に注目してー</p> <p>勤務校の生徒の実態として、反社会的な問題行動が極めて少なく、所謂いい子（過剰適応）と思われるがちな生徒が多く在籍している。その一方で、生徒の意識調査の結果からは、自尊心が低い傾向にあり、不登校等非社会的な行動が多く見られる。 そこで本研究は、生徒が充実した学校生活を送ることを目指し、教職員の情報共有のもと学校生活に困難を抱えている生徒を把握し、不登校の未然防止、組織的な支援の構築を目的としている。</p>
12	弘前大学 大学院	1年	長谷川 泰樹	三戸町立斗川小学校 教諭	<p>児童の主体性を育むキャリア教育のアプローチ ～教科領域と特別活動を横断して～</p> <p>本研究は、①各教科等で学ぶ内容を日常生活・職業・将来と関連させ、内発的な学習意欲を高めること②基礎的・汎用的能力の育成につながる活動を授業に取り入れること③清掃や給食・係活動・委員会活動の意義や価値を自覚させること等を通して児童の主体性を高めることを試みるものである。教職大学院1年目のため、次年度の現場での実践に向けて、仮説を検討している段階である。</p>
13	早稲田大学 大学院	修了	戸上 琢也	品川区立荏原第五中学校 教諭	<p>道徳的判断力を育む道徳科の指導の工夫 ー議論の中で、判断の根拠を比較・検討する学習活動を通してー</p> <p>「特別の教科 道徳」の全面実施に向けて、生徒同士が自分の考えについて判断の根拠を比較・検討する学習活動を行うことで、物事を広い視野から多面的・多角的に考えることができ、道徳的判断力を育むことができるであろうと考えた。具体的には、①道徳的判断力を育む学習指導過程、②判断の根拠を比較・検討する学習活動、③付箋紙を活用したワークシートを開発し、授業実践を行った。</p>
14	静岡大学 大学院	2年	岡本 曜	袋井市立周南中学校 教諭	<p>他者とのかかわりを通して学校適応感を高める手立て ー学校行事に注目してー</p> <p>不登校やいじめが依然として学校現場における大きな課題となっている今日、児童生徒がよりよい人間関係を形成し、学校への適応感を高めるための手立てとして、学校行事への期待が高まっている。本研究では、学校行事を計画から練習、本番、振り返りに至る一連の学びのプロセスととらえ、他者とのかかわりを意識した「学校行事の学びのプロセスモデル」を開発、実践、検証し、効果的な行事の取組や支援の在り方を模索する。</p>
15	京都教育大学 大学院	修了	小田 紘平	京都府立南山城支援学校 教諭	<p>身体接触を伴う運動が人間関係の構築に及ぼす影響の分析</p> <p>中学校2年生を対象に、保健体育の授業時間の内、準備運動の際に5分程度で出来る身体接触を伴う運動を実施した。本研究から、身体接触を伴う運動を行うことで①感情が出やすい雰囲気になり、コミュニケーションの量が増加すること②心理的な深まりにつながる③身体への気付きが得られること④身体的なコミュニケーションと心理的なコミュニケーションとはリンクしている可能性があることの4点を確認することができた。</p>

番号	大学院名	学年	氏名	現職、修了生の勤務校	成果発表のタイトル・要旨
16	大阪教育大学 大学院	修了	小林 洋子	豊中市立野畑小学校 教頭	<p>教員が授業に学校図書館を活用する力を高めるために</p> <p>発表者の所属するT市では、学校司書の配置、蔵書管理のシステム化、公共図書館との連携など学校図書館の充実を進めてきたが、これらを活用した授業実践においては教員間（学校間）で差があった。そこで、教員の学校図書館を活用した授業実践力の向上をめざし、独自の図書館教育計画・指導体系表を策定し、新たな研修を導入した。その結果、T市では学校図書館を活用した授業や教員への研修会を実施する学校が増加した。</p>
17	兵庫教育大学 大学院	2年	諏佐 利江子	宇都宮市立上河内西小学校 教諭	<p>教員と保護者の自身と子どもの捉え方の変容 —両者が参加する実践コミュニティを通して—</p> <p>教員や保護者が自身の子どもへの関わり方を振り返る機会を設けるために、学校内で希望者による計6回の意見交換会を実施した。会の開催にあたってはウェンガーら（2002）の実践コミュニティを参考とし、テーマは参加者から募り、全員が対等な関係となれるよう配慮した。意見交換会及び事後のインタビューの逐語録の分析から、会を通して参加者は自身を振り返るだけでなく、子どもの捉え方や子どもへの行動の変容が語られた。</p>
18	和歌山大学 大学院	2年	山岡 正史	和歌山市立伏虎義務教育学校 教諭	<p>実効性のある効果的な理科のカリキュラムづくり —小中の円滑な接続・連携を目指して—</p>
		1年	浦田 博史	海南市立亀川中学校 教諭	<p>指導要領における内容の系統性を捉えるために、小学校および中学校それぞれの学習指導要領解説理科編と教科書から、基本的な見方や概念を柱とした内容構成表を作成し、それをもとに実効性のある単元計画案を紹介する。また小中一貫校（義務教育学校）、小中連携校での実践を通して、期待される子供の姿や実際の成果等について説明する。</p>
19	香川大学 大学院	1年	松本 周子	和気町立和気中学校 教諭	<p>道徳の授業に対する生徒の受け止めと教員の困り感に関する分析 ～ 授業・「かがわ道徳ラボ」での学びを授業改善に生かして ～</p> <p>今後の道徳科における授業改善の視点を得るために、道徳の授業に対する置籍校の生徒の受け止め・反応、教員の道徳授業における困り感や、実践している工夫はどのようなものなのかについて調査を行った。これらの結果を受け止めながら、授業改善や道徳科への対応の視点を探っている。その際に、大学院での授業や「かがわ道徳ラボ」での学びが授業改善のヒントを得る場となり、評価や問題解決的な授業についても課題追究をしている。</p>
20	琉球大学 大学院	2年	西岡 華穂子	沖縄県立西原高等学校 教諭	<p>琉球国時代の和文・漢文を活用した授業実践 —「伝統的な言語文化」への興味・関心を広げる授業の試み—</p> <p>現行の高等学校学習指導要領（平成21年3月告示）「国語総合」の「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」への興味・関心を広げることを目指し、主体的・対話的で深い学びを意識した授業を構想した。方法として、沖縄に残されている琉球国時代の和文・漢文を活用した教材を開発し、古典を読むための知識・技能の習得をおろそかにすることなく、感性で触れられる郷土の伝統的な言語文化の学びを提案した授業実践を報告する。</p>

番号	大学院名	学年	氏名	現職、修了生の勤務校	成果発表のタイトル・要旨
21	千葉大学 大学院	修了	杉本 祥子	柏市教育委員会 学校教育部生徒指導室 指導主事	<p>「チーム学年」の形成過程における学年会の果たす役割 —児童理解を意識した授業づくりを核にして—</p> <p>今後の学校の在り方として、危機管理や教員育成の視点から、どのように「チームとしての学校」を実現していくか探る必要があるが、一つの方策として「児童理解を意識した授業づくり」を核に据えた学年会を定期的に行った。このことが、教師としての専門性を高めること、協働性を育むことに対し、どう有効に左右するか考察するとともに、ファシリテーターとして教職員の学年形成過程に関わることの意義や課題を見出した。</p>
22	新潟大学 大学院	2年	木村 杏子	新潟市立木戸小学校 教諭	<p>ユニバーサルデザインの視点を取り入れた学級・授業づくり ～特別支援教育コーディネーターの立場から進める学校体制づくり～</p> <p>特別支援教育コーディネーターの立場からユニバーサルデザインの視点を取り入れた学級・授業づくりを校内で推進した。研究推進部と連携して、①全職員によるユニバーサルデザイン化チェックリストの作成。②それを活用した定期的な自己評価。③授業記録ビデオを使った校内研修を実施した。その結果、授業記録をした3学級の授業改善が図られ、職員から校内研修の内容や方法に対する肯定的な評価が得られた。</p>
23	上越教育大学 大学院	2年	大坪 宏至	静岡市立清水第二中学校 教諭	<p>21世紀型能力を育成する教育課程の実現に向けての実践的研究 — 学校支援プロジェクトによる進学校の取り組み —</p> <p>本教職大学院では、学校の教育課題を解決する過程に参画する教育実践を「学校支援プロジェクト」と称し、院生が即応力・臨床力・協働力を身に付ける実践を行っている。今回、市内で一番の進学校である高等学校が「主体的・対話的で深い学び」を実現するために授業改善に取り組んでいる。そこにアクティブ・ラーニング型授業の一つ『学び合い』授業を通して、教職員の意識変容を元にした研究成果を発表する。</p>
24	岐阜大学 大学院	2年	熊崎 孝之	岐阜県立郡上北高等学校 教諭	<p>小規模高等学校における若手教員の授業改善に対する意識の向上 —研究推進委員会の導入を通して—</p> <p>小規模校の高等学校へ研究推進委員会を導入し、組織的かつ継続的な授業研究会を実施することで、授業改善の意識の変化を検証する。 岐阜県立郡上北高等学校は、生徒指導力や進路指導力が重視される学校風土があり、特に若手教員は、教科指導力の向上の必要性を感じにくい状況である。そのため、学校体制として授業研究会を実施することで、若手教員の教科指導力向上の動機づけとなる授業改善の意識の向上を目指していく。</p>
25	愛知教育大学 大学院	2年	外山 賢一	刈谷市立かりがね小学校 教諭	<p>Knowledge Management理論を用いた学校組織の知識創造についての研究 ～知識創造の過程における教師個人の成長について～</p> <p>本研究はKnowledge Management理論とAction Research論を用いて、授業研究における学校組織知の創造とその過程における教師個人の成長に焦点を当てた研究である。ここで新たなLesson Study SECIモデルを提唱し、学校組織知の創造に有効であるかどうか、質的・量的な実践・実証を試みた。明らかになった成果が、今後の学校現場における授業研究の活性化につながる研究である。</p>

番号	大学院名	学年	氏名	現職、修了生の勤務校	成果発表のタイトル・要旨
26	立命館大学 大学院	1年	田辺 記子	立命館守山中学校・高等学校 教諭	「ユネスコスクール」としての学校づくり 勤務校はユネスコスクールに認定されており、ESD（持続可能な開発のための教育）の推進拠点となっている。生徒全員が参加する海外研修を実施したり、高校生水フォーラムを開催したりと異文化理解や環境教育に取り組んでいるが、一方、それはユネスコスクールでなくともできる教育活動であろう。そこで本報告では、「持続可能な社会の担い手を育む教育」とは具体的にどのようなことなのかを考えてみたい。
27	広島大学 大学院	1年	宗本 千鶴	広島市立翠町中学校 教諭	若手教員を育成するミドルリーダーの役割に関する実践的研究 －教科と関連させた道徳の授業を通して－ 教科と関連させた道徳の授業への指導・助言を行い、若手教員への支援の在り方を検討する。さらに、若手教員を育成するために必要なミドルリーダーの役割が何であるか明らかにすることを本研究の目的とする。 具体的には、若手教員の担当教科である英語と関連させた道徳の学習指導案と、道徳と関連させた英語の学習指導案を開発し、若手教員に授業をしてもらいながら、ミドルリーダーとしてどのような指導・助言が効果的かを研究する。
28	愛媛大学 大学院	2年	猪野 啓士郎	松山市立清水小学校 教諭	教職員のコンプライアンス意識の向上と管理職と連携したミドルリーダーの役割 －教職員が主体的に取り組むコンプライアンス研修プログラムの開発を通して－ コンプライアンスについて、職員会議等での管理職からの指導のみでは、教職員の受け止めが受動的となったり、マンネリ化したりしがちで、意識の高まりが十分見られない場合がある。各人が当事者意識を持って主体的に参加できる研修を実施することが大切である。その役割をミドルリーダーが担うことにより、管理職と教職員をつなぎながら組織としての雰囲気づくりを進め、危機管理体制を構築していくためのプログラムを提案する。
29	福岡教育大学 大学院	2年	阪本 千珠	中間市立中間西小学校 教諭	学力向上に向けた組織的取組の推進に関する研究 －「学力向上重点取組」の具現化を図る検証改善システムの構築を通して－ 本研究は、学力向上に向けた「検証改善サイクル」を確立するために、PDCAサイクルが円滑に働くための手立てを含めた「検証改善システム」を構築し、教師のPDCAサイクルへの意識を高めることで、学校の組織的取組の推進を目指すものである。システムの構築に向け、「ツールの整備」「研修の充実」「協働体制づくり」の3つの視点から行ったマネジメントの実際について報告する。
30	佐賀大学 大学院	2年	中西 美香	佐賀県立佐賀商業高等学校 教諭	教職員の連携・協働づくりと学校変革に関する教育実践研究 －「フロンティア委員会」の設置を通じた学校活性化－ 所属校は、規模の大きい商業の専門高校である。各学年や校務分掌、教科ごとにそれぞれの職務を担って学校運営がなされている。しかし、専門高校の特性や大規模校ゆえに教職員が連携・協働する機会が少ない現状にある。そこで、本研究では、分掌や学年・教科の枠をこえた領域について協議して企画から運営までを行う「フロンティア委員会」を立ち上げ、これらの課題を解決すべく取り組んだ。今回はその実践事例を報告する。

番号	大学院名	学年	氏名	現職、修了生の勤務校	成果発表のタイトル・要旨
31	岩手大学 大学院	1年	村田 雄大	ストレートマスター	教職大学院の総合実習における学びと意義 ～附属幼稚園での実習を通して～
					岩手大学教職大学院では、学卒院生に対して授業・子ども支援・学校マネジメント・特別支援力を向上させる総合実習を行っている。この実習は、取得免許に関わらず、附属4校園（幼・小・中・特支）を全て経験し、異校種に対する理解を深めることがねらいである。校種間接続や子ども理解など、自らに生かせるような学びがなされたが、その成果はリフレクションによってもたらされており、ふり返りの重要性が示唆された。
32	宮城教育大学 大学院	修了	萩原 達也	利府町立青山小学校 教諭	小学校社会科における地域教材の開発とその指導の在り方 ～地域の歴史を生かした授業づくりを通して～
					地域の実態を生かした、見学や観察・調査などの体験活動を取り入れた小学校社会科のカリキュラムと授業プログラムを開発し、児童が郷土に対する愛情を深めるとともに、中央の歴史と地方の歴史との結び付きを理解することを目指した研究の過程を紹介する。また、自作資料を使った授業や地域に残る写真資料を使った授業では、現在自分たちが住んでいる地域と当時の中央とのつながりを具体的に意識した児童の感想を紹介する。
33	群馬大学 大学院	修了	本川 貴晴	伊勢崎市立北小学校 教諭	コミュニティ・スクールの仕組みを生かした自校の課題解決に関する実践的研究
					本校は、平成20年度のCSの指定をきっかけに地域の教育資源・人材の教育実践への活用と教育課程への位置づけに取り組んできた。しかし、取組の長期化で職員の当事者意識の低下や活動のマンネリ化が課題となりつつあった。 本研究は、有効な教育資源である学校運営協議会に着目し、学校評価を改善し学校課題を焦点化するとともに、課題解決に向け学校運営協議会と協働で、「家庭啓発」・「地域啓発」・「実践参加」という観点で取り組んだ実践である。
34	埼玉大学 大学院	2年	樺澤 徹	ストレートマスター	重度重複障害児における非言語コミュニケーションの実態把握の方法に関する研究 —肢体不自由校でのスヌーズレンの活用を通して—
					光と音楽、香りなどを併用して感覚刺激をする「スヌーズレン」を導入している学校が近年急速に拡大している。拡大の背景は児童・生徒の障害の重度・重複化を受け、教師のニーズが高くなったことであるが、重度・重複障害児を対象にした授業実践の報告は少ないのが現状である。 私は実地研究を通じスヌーズレン的な環境での授業実践を行い、児童の変容をまとめた。学校現場でスヌーズレン教育を成立させる課題についても述べたい。
35	聖徳大学 大学院	修了	高橋 静	柏市教育委員会指導課 指導主事	自尊感情に焦点を当てた、道徳の時間を中心とした「カリキュラム・マネジメント」について
					近年、将来の夢や目標が見出せない児童が増えている。道徳教育において自尊感情を高めるために「個性の伸長」を図ることを重視し「生きる力」を育むことが大切と考える。次期学習指導要領では「カリキュラム・マネジメント」の重要性が指摘されている。道徳科がスタートするに当たり、道徳授業と各教科等との関連を図ったカリキュラムの作成を通して、自尊感情を機能的に育成する方法を検証した。

番号	大学院名	学年	氏名	現職、修了生の勤務校	成果発表のタイトル・要旨
36	富山大学 大学院	1年	安田 陽子	南砺市立福野小学校 教諭	教職実践開発研究科での学びを基に、「聴き愛で、子供・保護者・地域とつながる学校」へ
					富大教職実践開発研究科に入学して半年間の学びや自分自身の変化についてのリフレクションをもとに、学び続ける教師に必要な資質・能力とは何か、また学びの方法としては何が有効かについて考察を行った。研究科での「リフレクション、カンファレンス、学び合い」を重視した活動の中で、「教師のリーダーシップと教師のエゴやサガの関係」「集団の力の利用と個への配慮の関係」「学校や教師の存在意義」「聴き愛」などに気づかされた。
37	金沢大学 大学院	1年	中島 卓二	野々市市立野々市中学校 教諭	行政参画提案型の「地域連携担当教職員」モデルの検討
					学校に「地域連携担当教職員」を配置し、「地域コーディネーター」と連携して「地域学校協働活動」を推進する体制づくりが各自治体で求められている。未導入自治体である自身の所属校において、導入後に求められる具体的校務の精選を行いつつ、組織横断的な連携会議体である“ののいちっ子を育てる”市民会議とともに、市民主導の形で新たな教育施策を行政に提案し協働する参画提案型の地域連携担当教職員モデルを提言する。
38	信州大学 大学院	2年	渡辺 祐一	千曲市立治田小学校 教諭	なぜ、ICT活用が校内や地域へ広がったのか？ ～学校拠点方式の特性を活かして～
					平成27年度、情報主任として校内でICT研修会を行ったが、文部科学省ICTチェックリストによる評価からは効果が見られなかった。平成28年度、信州大学教職大学院生としてICT活用が校内で広がるように、大学教員と共に拠点校の現状を把握し実践した。その結果、文部科学省ICTチェックリストによる評価から、ICT活用を校内で広げることができた。平成29年度、校内での実践を郡内他校に広げることができた。その具体的な実践内容を発表する。
39	奈良教育大学 大学院	2年	中川 聡之	奈良市立鳥見小学校 教諭	認知特性に応じた書字支援 ～通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童への効果的な支援方法の検討～
					漢字書字についての学習困難を抱える児童について、児童の認知特性やそれに関連する認知処理様式に応じた支援を行い、その効果を検討した。書字の特徴に関する評価をもとに認知特性を分析し、個々の特性に応じて視覚的・聴覚的な支援を中心に実践した結果、それぞれ学習の効果が得られた。また学習支援によって得られた成果をもとに、個々の認知特性を分析する指標を作成し、児童の実態把握・支援方法の決定に資することができた。
40	岡山大学 大学院	2年	島田 和紀	高梁市立高梁小学校 教諭	学校全体で取り組む特別支援教育体制の構築 —教員の意識を中心に—
					学校全体で取り組む特別支援教育体制を構築するためには、教員のチーム援助志向性を高めるとともに、特別支援教育に対する不合理な信念（イラショナル・ビリーフ）を修正していくことが必要である。そこで校内研修で事例検討会を行ったり、校内委員会や学年会等で子どもの情報交換を活性化するシステムを構築したりした。その結果、教員のチーム援助志向性が高まり、特別支援教育に対する意識の変容をもたらすことができた。

番号	大学院名	学年	氏名	現職、修了生の勤務校	成果発表のタイトル・要旨
41	山形大学 大学院	2年	阿部 高典	寒河江市立寒河江小学校 教諭	<p>初任教師を含む学年集団における省察の実践</p> <p>本研究は、学年集団（小3）において、初任教師（F教諭）と先輩教師（筆者＝A）が並び見の関係を構築しながら実践と省察を行うことが、教師の力量の形成につながることを明らかにするものである。1学期は、授業後の対話（月2回程度）による省察を行った。2学期は、二人で協働的な単元づくりと授業実践への取り組みを行い、省察をその後の授業実践に反映させていきながら、初任教師の授業力量形成の過程を探った。</p>
42	宇都宮大学 大学院	2年	大森 一久	鹿沼市立北犬飼中学校 教諭	<p>事実をもとに省察する教師集団の形成について —子どもの姿を語り合う授業研究を核にして—</p> <p>中学校では全校で授業研究に取り組む姿勢が弱く、教える内容や記憶の量を重視して生徒の学びに寄り添う観察をしない現状がある。そこで、生徒の様子中心に撮影したビデオを10分以内に編集し、少人数で放課後15分のリフレクションを行う。 これを繰り返して生徒の学びを観察する眼を養い、全体で行う2回の授業研究の質を改善しようと試みた。教科や学年の枠を越えて学び合える教師集団の育成を目指した実践と省察について発表する。</p>
43	東京学芸大学 大学院	2年	細谷 邦弘	横浜市立永田台小学校 教諭	<p>ホールスクール・アプローチを実践する小学校における教職員のESDに対する認識の変容過程 —ライフヒストリー・インタビューを用いたM-GTA分析によるモデル化を通して—</p> <p>ホールスクール・アプローチに基づいた全学的なESD（Education for Sustainable Development）の実践をしている学校の教職員のESDに対する認識や変容がどのような過程を経て、どのような影響を与えるのかを分析する。ホールスクール・アプローチの実践校として高く評価されているA小学校の教員に対して、ライフヒストリー・インタビューを用いた実践をし、得られたテキストをもとに修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（M-GTA）の手法を使って分析を進める。</p>
44	帝京大学 大学院	1年	関井 隆志	相模原市立相陽中学校 教諭	<p>授業改善のための校内研究の充実 ～教師の語りを通じた校内研究活性化のための循環モデルの追究～</p> <p>日本の教育において、これまでに様々な教育課題の解決に向けた授業研究が行われてきたが、現代の授業改善に関する研究は渾然とした状況である。教員として勤める中で、授業改善のための校内研究に関する課題や悩みが同僚から聞かれ、先行研究でもその困難な状況が明らかにされている。このような現状を乗り越え、中学校における授業研究のための校内研究をどのように活性化させればよいか、教師の語りを通して追究した。</p>
45	横浜国立大学 大学院	1年	尾澤 知典	横浜市立緑園東小学校 教諭	<p>メンタリングにおける協働での指導案作成がメンターとメンティに与える効果の検証</p> <p>本研究では、小学校において、経験のある教師（メンター）と経験の浅い教師（メンティ）が指導案を協働で作成することによる効果を検証する。実践の結果、メンティが指導法を学ぶことができ、やり取りをする中で互いにアイデアの創発が見られた。これは、協働で作成に関わることによって、参加者が「情報を 得る（見る・聞く）→考える→発信（主張・問う）」のサイクルを繰り返していたためと考えられる。</p>

番号	大 学 院 名	学年	氏 名	現職、修了生の勤務校	成 果 発 表 の タ イ ト ル ・ 要 旨
46	福井大学 大学院	2年	坪川 修一郎	福井市明新小学校 教諭	新しい世代を支え合い学び合うことの意味
					新しい世代、特に若手教員の力量形成については今日、教育現場で急務の課題となっている。そのような状況の中で私自身が出会った三つの「支え合うコミュニティ」について、新しい世代と支え合い、学び合うという視点から省察していった。その結果浮かび上がってきた、同僚性（支え合う関係性）や子どもの姿を語り合う多様なコミュニティの意味について「気づくこと」をキーワードに報告していく。
47	山梨大学 大学院	2年	近藤 千佳	市川三郷町立三珠中学校 教諭	教師が主体的に学び合える中学校校内研究会の取り組み
					中学校の現場では校内研究において教科の専門性という壁に阻まれ、教師の学び合いの場がうまく機能していないという課題がある。これらの課題を改善するために教師自らが主体的に学び合い、教師一人ひとりの教師力向上を目指した校内研究会に取り組んでいきたいと考えた。今年度研究主任として校内研究会を運営していく中で行ってきた「グループ決めのアイスブレイキング」、「アイデア付箋の活用」、「グループ協議を取り入れた学習会」等について提案する。
48	常葉大学 大学院	1年	安川 剛史	浜松市立新津小学校 教諭	チーム力と全教員の資質・能力向上を図るネットワークづくり ー研修チームを職場活性化に活かしてー
					教育を取り巻く環境に様々な課題がある中、この先教員の年齢構成が大きく変わり、若手教員の割合が高くなる。 また、多忙化が指摘される学校現場における教員間のコミュニケーションの在り方も問題視されている。 そのため、これからの学校にはミドルリーダーを中心とする若手教員育成システムを確立することが急務である。 そこで本研究では、学年を越えたベテラン・中堅・若手を一つのチームに編成して取り組む「アクティブタイム」を事例に今後の校内における人材育成の在り方について提案する。
49	山口大学 大学院	2年	中原 恵子	柳井市立柳井中学校 教諭	学びをつなぐ研修コーディネーターとしての役割 ー教職大学院における「理論と実践の往還」モデルの提案ー
					「多忙化を生まずに資質能力を向上させる研修」を開発することを目的とした研修システムとして7C'Sを考案した。7C'Sとは、Change、Connection、Creativity、Chance、Convenience、Communication、Collaborationから着想したプロジェクトをさす。人、情報、モノをつなぎ、学びが実践につながる研修を提供することを通して、負担感を充実感に変えるきっかけを創り出し、組織文化を発展させることに挑戦した成果を発表する。
50	宮崎大学 大学院	1年	新名 祥弘	宮崎市立江南小学校 教諭	校内研修を通じた教職員の意欲向上についての研究
					「学び続ける教員像」を具現化するための職員研修の在り方についての研究である。特にOJT（On-the-Job Training）の観点から、校内研修の現状と教育動向から変わろうとする新たな研修についての研究を行ってきた。独立行政法人教職員支援機構の研修教材・無料動画コンテンツを学校現場で、校内研修として活用する方法など、新たな職員研修の体制・内容・方法についての視点からの研究である。